



Title	ネガティブな出来事について
Author(s)	柏端, 達也
Citation	年報人間科学. 1992, 13, p. 163-177
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10419
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ネガティブな出来事について

日常われわれが「タイプライターは机から落ちなかった」、「結局昨日彼から電話はかかって来なかった」、「その水が凍らなかったのは、きっと何か不純物が混入したからだ」、「七時に目覚まし時計が鳴らなかったの……」などと言うとき、あるいは歴史家が、軍事衝突に至らなかった理由や政策的な不介入がもたらしたものの、ある思想が特定の文化圏で流行しなかった原因などについて語るとき、「ネガティブな出来事」とでも言うべきものが問題となつているように見える。

しかし一方、それらを出来事と呼ぶには当惑が感じられることもたしかである。タイプライターの落下といった場合と比べて、さらにはある国家体制の崩壊といった場合と比べても、ネガティブな出来事においては「実際何も変化していない」ように思えるからである。われわれはこの当惑に素直に従って、ネガティブな出来事は正

柏端 達也

真正銘の出来事ではないとすべきなのであろうか。すると、因果関係は出来事の間の関係であるとか、歴史家は過去の出来事を叙述するとかいった広く受け入れられた見解に修正を施さなければならなくなるか、さもなければネガティブな出来事に関わっているように見える多くの言明を、因果言明や歴史叙述としては不完全なもの、あるいはまがいものであると結論しなければならなくなるだろう。逆にもしこの当惑が一種の錯覚や偏見であるとするなら、出来事とは変化であるというこれも広く受け入れられた見解にいくらか但し書きを加えた上で、その当惑がいったどこから来るものであるのかを明らかにしなければならないだろう。第二の選択肢をとるべきだと私は思う。以下では、その方向に沿ってネガティブな出来事を論じることにする。

哲学史にとってネガティヴな出来事はなじみのない奇妙な概念ではない。ネガティヴな出来事に対する言及は、そのような名で呼ばれているとはかぎらず、しかも断片的にはあるが、いくらか見出すことができる。しばしばネガティヴな出来事は、風変わりな因果言明の一部を構成するものとして、あるいは因果性についての一般的な理論に対する反例として、引き合いに出される¹⁾。しかしまたまった形で言及されることが多いのは行為論の文脈である。以下ではその数例を取り上げる。そうすることで、ここで言う「ネガティヴな出来事」が具体的にどのようなものであるかを、より明確にできるだろう。

アーサー・ダントは行為論を展開する中で、「Xは起こらなかった(X did not happen)」と「 \neg Xが起こった(not-X happened)」の区別を強調している²⁾。彼によれば後者は前者を含意するが、その逆は成り立たない。後者は「ネガティヴな出来事(negative event)」の生起を表しているのである。ダントの関心は「行為として」あるいは「行為において」生起するネガティヴな出来事に集中しており、彼はそれらを「基礎行為(basic action)」との関連からいくつかのタイプに分けている。たとえば、腕を上げるよう命令された人がそれに逆らった場合の「腕を上げなかったこと(his not raising his arm)」³⁾は、基礎行為として生起したネガティヴな出来事である。

他方、耳栓をさせることで船員達をセイレーンの歌声の誘惑から守った場合、「彼らがセイレーンの歌声に応えなかったこと(their not answering the Sirens' chant)」はネガティヴな出来事であるが、その基礎行為に対する関係はより複雑である。ネガティヴな出来事を特定の観点から分類することは可能であり、そうした概念の整理は有益なものであろう。だがダントの分類をここで一つ一つ検討することはしない。行為と密接に結びついたネガティヴな出来事の分類なら、次に述べるG・H・フォン・ウリクトの観点に従った方が、より明解なものを得られるからである。

ウリクトは、出来事を(出来事と呼ぶものの全てではないにせよ、その主なタイプを)状態の順序対として分析する。出来事とはある状態からある状態への変化であり、変化はさらに、状態の消滅といった要素的なものへと分析できる。彼によれば $pT \sim p$, $\sim pT \sim p$, $pT \sim p$, $\sim pT \sim p$ の四つが要素的な変化すなわち出来事であり、それら四つは互いに排他的で、かつその四つに尽くされる。四つの中に $pT \sim p$ および $\sim pT \sim p$ の形のものが含まれることから明らかに、ウリクトの言う変化とは不変化をも含む広い意味での「変化」である⁴⁾。

ウリクトが不変化を出来事のカテゴリーに含めた理由は多分に形式的なものである。また出来事のこの分析も、行為および(義務や許可といった)行為の指令の分析という特定の目的を背景としたものである。だからネガティヴな出来事そのものにウリクトの関心があるわけではない。だが彼の体系は(とくに行為に関連した)ネガ

ティヴな出来事を扱うことになる。彼は、行為において為された不変化、すなわち行為の成果としての不変化について述べている。⁽³⁾ 成果が不変化であるような行為は、彼の体系では大別して二種類である。第一にpを保存したりpの発生を阻止したりする行動がある(彼の表記法ではそれぞれ $\nu(pTb)$ および $\nu(\sim pT\sim p)$)。タイプライターが机から落ちなかったことは、タイプライターを机からずり落ちさせないという行動の成果でありうる。したがってそれは、ウリクトに従うなら、れっきとした出来事たりうるのである。第二に、pを消去したり産出したりすることの差し控えがある($\sim(pT\sim p)$ および $\sim(\sim pTb)$)。パスポートを取り上げられなかったことは、パスポートを取り上げるのを勸弁するという差し控えの成果というネガティヴな出来事でありうるのである。

ところでウリクトは出来事と行為をカテゴリー上厳格に区別しているのであるが、ここでは端的に行為を出来事として扱ってもかまわないと思われる。この点に関しては彼の言葉使いにこだわらないことにしよう。すると差し控えは端的に出来事であると言ってよいことになる。よって、たとえば挨拶を差し控えることもネガティヴな出来事である。⁽⁸⁾ また、pの保存や抑止の差し控え($\sim(pTb)$ および $\sim(\sim pT\sim p)$)も成果はネガティヴでないものの、その行為自体はネガティヴな出来事であると言うことができる。タイプライターが落ちるにまかせて何もしなかったことは、ネガティヴな出来事なのである。

行為の差し控えは、ギルバート・ライルが「ネガティヴな行為

(negative 'action')」と呼んだものの主要な部分を成している。彼によればそれは、「あることをしているときにしていない無数に多くの他のこと」と明確に区別される。「差し控える」、「取りやめる」、「無視する」、「目こぼしする」などは、それらが意図的に為されることであり、非難や賞賛などの対象になるというかぎりでは、そして、特徴的な仕方ではあるがとにかく時間的に限定されているというかぎりでは、まさに行為に分類してよいようである、とライルは述べる。⁽⁹⁾

以上の論者はそれぞれ異なった脈絡でネガティヴな出来事を扱っているが、行為との関連で論じている点では共通している。そのようにしばしば行為との関連で論じられるというのは、ネガティヴな出来事の一つの特徴である。しかしそれは傾向であって本質的なことではない。以上にあげたような仕方では行為と密接に結びついていないネガティヴな出来事を考えることは可能である。

ダントがネガティヴな行為でないとしたケースは、そのまま、行為ではないネガティヴな出来事の例になっている。ダントが述べるように、ある人が命令を理解しそなうて腕を上げなかった場合や命令に従おうにも腕を上げる能力を失っていて腕が上がりなかった場合、腕を上げなかったことはネガティヴな行為ではない。しかしそれは、腕が胴体の両側に下がっているほとんどの場合われわれはネガティヴな行為を遂行していないというような意味で、そうなのではない。⁽¹⁰⁾ 命令が理解できなかったりして腕を上げなかったことはネガティヴな行為ではないが、それでもやはり命令が存在したその

文脈においては、ネガティヴな出来事と言えるのである。(この場合「彼の腕が上がらなかったこと」と記述した方が誤解を招きにくいかもしれない。)

さらに、そのような行為の「失敗」にすら関わっていないネガティヴな出来事も考えられる。たとえば「スプリングラーの不作動が火事をひき起こした」と言うとき、当然のことながらわれわれは、そのスプリングラーの不作動を成果とするような行為を念頭に置いているわけではない。単に認識上の問題ではなく、実際そのような対応の行為は存在しないかもしれないのである。

2

行為と密接に結びついたものが注目されるという傾向の他に、ネガティヴな出来事の論じられ方を特徴づけていることがある。ネガティヴな出来事を真正正銘の出来事と言い切ることへの当惑、あるいは躊躇である。そしておそらくこちらの傾向に、より注意する必要がある。

ライルは結局「ネガティヴな『行為』」を真正正銘の行為とすることをためらった⁽¹⁾。ウリクトもある論文の中で、*pt-p*と*qTq*に分解できるものこそが、状態からへへの変化のうちで「純粹のもの」である、としている⁽²⁾。基礎行為の一つにネガティヴなものを数えあげたダントでさえ、あるタイプのネガティヴな出来事の「奇妙さ」を口にして⁽³⁾いる。この傾向はある程度健全なものであると言え

る。ネガティヴな出来事の「奇妙さ」は日常的な感覚としてわれわれに共有されているものであろう。しかしその感覚はときにネガティヴな出来事の扱いに偏りを与えることがある。そのような場合それは、出来事概念に対するより広範囲に影響力をもったある先入観と結びついているのである。

それを見るためにライルの議論を追ってみよう。ライルの議論は「ネガティヴな『行為』」を行為と呼んでよいか否かをめぐって展開されている。彼は、そのように呼んでよいと思われる理由を前述のとおりいくつかあげているが、それ以上にそう呼ぶべきではないと思われる理由を熱心にあげている。彼によれば、「ネガティヴな『行為』」には熟練がないし、その遂行に特有の道具も材料も要しない。また(ライルはこちらの論拠をより重視しているようであるが)「ネガティヴな『行為』」には、特有の下位行為が存在しない。たとえばわれわれは辞表を作成することにおいて文字を記し、文字を記すことにおいて紙にインクを付着させるが、挨拶を差し控えることは挨拶を差し控えることでしかない。たしかに挨拶を差し控えるとき、われわれは代わりに他の何事かを——たとえば目の前の料理を黙々と食べ続けたり——することになるうが、挨拶を差し控えるために特有の下位的な何かをする必要はない⁽⁴⁾。こうして彼は最後まで「行為」に付けられた引用符を外さなかった。

しかし為す術を知らなかったり、必要な道具や材料が入手不可能であったりするために為すことができないことは、それを差し控えることもできないという事実を考慮すれば、ライルの前半の根拠は

薄弱である。さらに、ネガティブな行為がその下位にいかなる特有の行為も持たないというのも厳密には正しくない。われわれは、ミサイルの発射を取りやめることの低位行為として、ボタンを押さないことを為し、さらにその低位行為として、指を押し下げないということを為しうるからである。思うに「低位行為」と言ったとき、ライルは、その「底」に身体運動と同一視できるか、あるいはそれを本質的にともなう行為が存在することを前提としていたのである。だが、行為の概念の多様性を認め、様々な行為の間の重層的な関係やそうした層を成す「上位」と「低位」の行為の關係の多様性に目を向けさせてくれるライルの議論の展開からすれば、彼は最後に引用符を外すべきだったのではないだろうか。

ライルの態度は出来事に関してわれわれが抱きがちな先入観を反映したものであると思う。出来事とは物理的対象における實際の変化である、という先入観である。しかしこの「實際の」の意味合いは全く定かでない。以下で、ネガティブな出来事もまた「實際の」出来事であるということを複数の点から示そう。

3

まずネガティブな出来事は、そうではないふつうの出来事（對比して『ポジティブな出来事』と呼ぼう）と同じように時点が特定されている。⁽¹⁵⁾ライルは、ネガティブな行為の時間的な限定のされ方がふつうの行為に比べて癖のある特徴的なものであると考えていたよ

うだが、その差は程度的なものであり本質的なものではない。

まず「タイプライターは机から落ちなかった」は状態に関する文ではない。それはタイプライターが無時制的に机の上にあると言っているのではない。「タイプライターは机から落ちなかった」という文は、たとえば机が傾いたそのときのことについて何かを言っているのである。また「タイプライターは机から落ちなかった」は、少なくともある時点においてタイプライターは机から落ちていない状態にあったと言っているわけでもない。それは「一時間前にはまだタイプライターは落ちていなかった」のような、現時点ではすでに生じているタイプライターの落下という暗示された変化の初期状態についての文とは明確に異なるのである。

タイプライターが机から落ちなかったことは、まさに出来事のカテゴリーに対する仕方で時点が特定される、と言いたい。たしかに「昨日彼から電話があった」に対して「かかってきたのは昨日の何時分ですか」と問えるのに比べ、「昨日彼から電話はかかって来なかった」に対しては「かかって来なかったのは何時分ですか」と問うことができないように思える。しかしその差は表面的なものである。たとえば「三月の最後の日曜日に引越した」と言ったとき、引越したのは三月最後の月曜日ではなく日曜日であったという程度には時点が特定されているものの、さらに「引越したは三月最後の日曜日の何時ですか」と問うことはできないかもしれない。「引越したは三月最後の日曜日の何時分何秒の出来事だったか」と問うことはふつう馬鹿げている。たしかに引越したを、一つの出

来事というよりはむしろ一連の下位的な出来事から成る過程と見なして、より細密化されたレベルで期間を特定することもできるだろう。しかし、引越しが為された期間を厳密に特定しようとしても、どの下位的な出来事を引越しに含めるかによって開始と終了の時点は大きく変動し、その境界を時間単位で特定することすらおそろく困難であろう。また引越しが為された期間を、引越しに属する下位の出来事が埋め尽くしているわけでもない。「三月の最後の日曜日に引越した」という文において、時点はたかだか「三月の最後の日曜日」に特定されているにすぎず、そしてそれ以上は特定できないかもしれない。ポジティブな出来事であるからよりいつその時点が特定されるということはないのである。

またネガティブな出来事は、ポジティブな出来事と同じように因果言明を構成しうるように思える。六時における電池の抜き取りが、七時に目覚まし時計が鳴らなかったことをひき起こしたのかもしれないし、昨日彼から電話がかかって来なかったことは、ある電話線事故の結果かもしれない。ある人が挨拶をしなかったことは別のある人の憤慨をひき起こすかもしれないし、自動制御装置の不作動はシステムの暴走の原因になりうるだろう。因果性に関する何らかの一般理論を前提すれば、たしかにこれらを因果言明のクラスから切り捨てることができるかもしれない。しかしむしろ、そうした理論の限界をこれらの例が示していると取るべきではないだろうか。

4

ネガティブな出来事にはポジティブな出来事に比べて何か欠けたところがあると考えたくなる傾向は、否定文に特有の『限定の不充分さ』に由来するのかもしれない。文が知識を表現するという観点から、次のように言われることがある。すなわち、否定文は有用でかつ現実の事柄に関わる真正の判断でありうるが、必要な知識へ到達するまでの前段階的な知識を表現するにすぎない、と。「スミス婦人の帽子は緑ではない」は、それが「スミス婦人の帽子は緑ではなくて、何か別の色である」へと分析されるならば、「スミス婦人の帽子は赤である」といったさらなる肯定文的な知識を得るための足掛かりである、というのである¹⁶。

ひょっとすると否定語を含む多くの文についてそのように言うるかもしれない。だが少なくとも、問題のネガティブな出来事に関する文が（その多くは否定語を含むものの）そのような分析を受けつけないことはたしかである。「だから遅刻した」が後に続くような文脈において述べられた「目覚まし時計は七時に鳴らなかった」という文を考えよう。その文が、「スミス婦人の帽子は緑ではない」が充分に限定されていないという意味で、限定されていないとは考えられない。それを、「目覚まし時計は七時に鳴らなかった。七時ではなくて別の時間に鳴った」や「目覚まし時計は七時に鳴らなかった。その目覚まし時計ではない別のものが鳴った」や「目覚まし

時計は七時に鳴らなかった。鳴ったのではなくて別の動作をした」等に分析するのは、的外れである。その文は、たとえば「目覚まし時計は八時に鳴った」という肯定文的な知識に至るための足掛かりではない（かりに実際八時に鳴ったとしても）。

ネガティヴな出来事に関する文が何らかの仕方で現実に関わるのであるとしても、それは必要な事柄を知るまでの前段階という形で関わるのではない。このことは、ネガティヴな出来事に関する否定文と他の多くの否定文との違いを示唆している。その違いは、ダントが「 $\neg X$ が起った」を「 X は起こらなかった」から区別すること、また、ライルが「ネガティヴな『行為』」を「あることをしているときにしていない無数に多くの他のこと」と区別すること、示そうとした違いにはかならない。この違いは重要である。ネガティヴな出来事に関する文が、否定にまつわる哲学史上の諸々の（いくつかは不毛な）論争から切り離されるように見えるからである。¹⁷⁾

ネガティヴな出来事に関する文が前段階的な知識を表現しているのではないとすれば、それは何らかのすでに十分な知識を表現したものであるか、何も表現していないかのいずれかである。そして後者の選択肢を私はとらない。ネガティヴな出来事に関する文が、「美德は四角形ではない」といった種類の文でないこともまた明白である。¹⁸⁾

5

いったいどのようなときに出来事や変化は、まがいものであるとかにせものであるとか言われるのであろうか。にせの変化あるいはにせの出来事として知られるものに、ピーター・ギーチの指摘した「単なる『ケンブリッジ』変化 (mere 'Cambridge' change)」がある。¹⁹⁾ ソクラテスが（二十世紀に）ある新入生に尊敬されるようになることや、5がある人の子供の数であることをやめることなどがその典型的な例である。これらをギーチは「にせものの」「リアルでない」変化とする。「リアル」な変化とそうでないものを区別する充分な規準をギーチが提出しているわけではない。ただ彼は、変化が「リアル」であるかどうかは、少なくとも、変化を被るとされるものの現実性の有無に依る、と考えているようである。すなわち「ソクラテスは、もし彼がすでに死んでいるなら、そして数も、数の場合はつねに、「リアル」な変化を被りえない」のである。²⁰⁾ おそらく、例にあげた「単なる『ケンブリッジ』変化」は「リアル」な変化でないと断言してよいものであろう。そしてネガティヴな出来事が「単なる『ケンブリッジ』変化」でないことも明らかである。すでにあげたネガティヴな出来事の例には、故人も数も変化を被る主体として登場していない。ここまでは問題ない。

ジェグオン・キムは、ギーチの「単なる『ケンブリッジ』変化」を「ケンブリッジ出来事 (Cambridge event)」と「 \neg 換え」て、

「リアルでない」「寄生的な」出来事についてのより広範な議論を展開している。²¹そこでもネガティヴな出来事がそのまま「ケンブリッジ出来事」の例であることはない。だがキムのような立場からすればネガティヴな出来事も、「ケンブリッジ出来事」が「リアルな出来事」や「リアルな変化」ではない」とされたのとまさに同じ前提によって、「リアル」でないとされかねない。

しかしじつは、キムの「ケンブリッジ出来事」はギーチの「単なる」「ケンブリッジ」変化」とは別物である（少なくともキムが言うような「典型例」ではない）。そして「ケンブリッジ出来事」を「リアル」でないとする論拠には、議論の余地がある。キムやマイルス・ブランド²²があげる「ケンブリッジ出来事」の例は、ソクラテスの妻クサンティッペが未亡人になることや、ある人がおじになることなどであるが、直観的に言ってキムらの例はギーチの「単なる」「ケンブリッジ」変化」がもつ不条理さを欠いている。ギーチが考察したのは「変化」であり、その際変化を被るものが何であるかということがつねに問題とされていた。ギーチは、死後何世紀も経ったある日ソクラテスがひとりの新入生に尊敬されるようになることが、ソクラテスの身の上に生じた変化としては「リアル」でないと断言しているのである。そしてもちろん、キムの例で、クサンティッペがソクラテスに比べて変化を被る主体として現実性を欠くということはない。ギーチは、キムが言うような「ケンブリッジ出来事」（あるいはブランドが言うような「関係的出来事」）を、キムがあげたような論拠に基づいて、「にせもの」であるとしたのではない。²³

「ケンブリッジ出来事」が「リアル」でないとするキムの論証は必ずしも理解しやすいものではない。生起した場所や「依存関係」に関する彼の議論は、特定の哲学的立場を前提としない限り、「ケンブリッジ出来事」の価値を下げるには論拠として薄弱である。²⁴「ケンブリッジ出来事」が因果言明を構成できないというのも納得しがたい。因果言明の主張可能性についてキムが考えていることは明確でないが、少なくとも法則化可能性が前提とされているようである。しかし個々の（単称の）因果言明がそのままでは法則化を見込めないということはむしろふつうである。「ソクラテスが毒杯を飲み干したので、クサンティッペは未亡人になった」に奇妙さが感じられないのはもちろんのこと、「ソクラテスによる毒杯の飲み干しとクサンティッペの未亡人化の間には因果関係がある」や「ソクラテスによる毒杯の飲み干しがクサンティッペの未亡人化をひき起した」²⁵さえもあからさまに直観に反するとは思えない。

キムの結論の背景にあるものには目を向ける必要がある。ソクラテスが為した毒杯の飲み干しやソクラテスの身に降りかかった死といった、物理的対象の上に生じる「リアルな変化」こそが真正正銘の出来事である、とキムは考えた。そしてそのような「リアルな変化」のみが因果連鎖を構成するとしたのである。²⁶類似の前提、類似の先入観は、ライルの躊躇の中にもより控えめな形で見ることができた。そしてここでもまた「リアル」の中身が明らかでないのである。もし「リアル」と言うことに意味があるとすれば、ネガティヴな出来事に関しては、むしろ次のように言うべきであろう。ポジテ

イヴな出来事もネガティヴな出来事もともに「リアル」であるか、ともに「リアル」でないかのいずれかである。

6

キムは、クサンティッペの未亡人化のような出来事はソクラテスの死に対して「寄生的」であると述べている。²⁷ クサンティッペの未亡人化を「寄生的」と言うことの意味はともかく、それに対応するソクラテスの死のような誰にも文句のつけようがない真正正銘の出来事²⁸の存在が、そのように言うことを可能にしている。もしもネガティヴな出来事が属する「出来事の階層構造」の「より基礎的な」²⁸ところに、つねに、ソクラテスの死のような紛れもないポジティヴな出来事があるのなら、ネガティヴな出来事もまた「寄生的」であることになる。問題はアンスコム²⁹デイヴィッドソンの出来事観に従った言葉使いで表現しても同じである。すなわちに全てのネガティヴな出来事をポジティヴな出来事として記述し直すことができたなら、ネガティヴな出来事は、出来事の単なる風変わりな仕方による記述にすぎないということになってしまいうだろう。つまり「ネガティヴな出来事」という出来事の種類の種類があるのではなく、そのような種類の出来事の記述があるにすぎないことになるだろう。たしかに、ある試験に及第しなかったことは、その試験に落第したことにほかならない。特定の試験に及第しなかったと述べることは、その試験を受けたということを含意せずには不可能であろうか

ら、及第しなかったことは即座に落第を意味するのである。しかしこのケースは例外であり、ここで扱っているネガティヴな出来事からは除外すべきであろう。ネガティヴな出来事が一般にこのような仕方²⁹でポジティヴな形に言い換えられるとは考えられない。むしろライルの指摘が示唆するように、下位に——すなわち「より基礎的な」²⁹ところに——ポジティヴな出来事をもたないのがネガティヴな出来事なのである。

ただし逆の方向への言い換えが考えられる。つまり今年クリスマス・ツリーを飾らなかったことを、毎年クリスマス・ツリーを飾るという習慣の廃止として再記述することはできないだろうか。同様に自動制御装置の不作動を、それまで必要ときには正常に働いていたという実績の消滅と言い換えることはできないだろうか。この場合、不変化（ネガティヴな出来事）はより上位の変化（ポジティヴな出来事）として再記述されることになる。さらに、昨日彼から電話がかかって来なかったことを、彼が約束を破ったことと言い換えることはできないだろうか。こうした提案は魅力的なものに見える。全てのネガティヴな出来事には、計画が破綻することや、期待や懸念や予想に反すること、命令や規範に背くこと等が伴われているように思えるからである。ネガティヴな出来事は非常に広い意味での期待の破綻として再記述できるのだろうか。いずれにせよこの言い換えが、ネガティヴな出来事は寄生的であるとする見解に有利に働くことはない（電話をかけないことによって約束を破るのであって、その逆ではないのだから）。そしてそれは期待という新たに

説明を要する概念を持ち込んでいる点で、ネガティヴな出来事の本質をより明確にするものであるとも言えない。ただ、このように言い換えることで、ネガティヴな出来事が出来事やそれらの繋がりに対するわれわれの基本的な理解に関わっていることが明らかになるのである（それについては次節の最後でもう一度触れる）。

7

ネガティヴな出来事に関する文が否定文としては限定のされ方の点で例外的であるということ、ネガティヴな出来事が他の多くのポジティヴな出来事に比べて「リアル」さや、時間的な特定のされ方の点で「出来事」と呼ぶのに遜色がないということは、すでに示した。この節では結びとして、次の二点を指摘しておこう。

私は、ネガティヴな出来事とそうでないポジティヴな出来事との間にはいかなる区別もないということを主張したいのではない。それらの間には、むしろ注目すべき違いが存在する（その違いはネガティヴな出来事が何か劣ったまがいものの概念であることを示すものではない）。われわれは適当な規約を受け入れるなら、いくらかも機械的に、些末な出来事を作り出すことができる。出来事を異なる状態の順序対と規定したなら、たとえば自分の身長を越える位置への左手の薬指の先端の到達といった「出来事」を、いかなる文脈に組み込まれることをも想定せずに考え出すことができる。だが、そのような仕方ではネガティヴな出来事を作り出すことはできないと

思われる。これはネガティヴな出来事の特徴の一つであろう。そしてネガティヴな出来事の論じられ方の第一の傾向——行為との関連で取り上げられやすいこと——は、この点に関わっている。つまりその傾向は、特定の文脈から切り離してネガティヴな出来事に言及することの困難さ、あるいは不可能さの表れなのである。この「文脈依存性」は、ネガティヴな出来事がとくに寄生的であるということとを意味しない。むしろそれは出来事一般を扱うわれわれのやり方に沿うものである。つまり言語活動においてふだんわれわれが「出来事」に言及するのは、原因を究明したり責任を帰属させたりといった特定の文脈においてなのである（顕著な場合、出来事は「事件」、「事故」と名指される）。注目すべきは、ネガティヴな出来事への言及が日常の会話や法の言説、あるいは歴史叙述の文脈において頻出するにもかかわらず、出来事に関する哲学的な一般理論では例外として扱われがちであるということである。

指摘すべき第二の点は、ネガティヴな出来事に注目することで、出来事のカテゴリーによってわれわれが世界を把握する営みの重要な側面に光をあてることができるという点である。ネガティヴな出来事は、出来事の「繋がり」についてのわれわれの理解に深く関わっているのである。

明確な因果法則を提出できないにしても、因果関係について口にする際、出来事の間への何らかの繋がりを、われわれはある意味で、つねに想定していると言える。そのような出来事の繋がりは多種多様であるので、「因果関係」といった語を可能なかぎり広く使ったと

しても、その全てを因果関係とするのは適切でないかもしれない。そこには、「自然法則」を暗示するような規則性はもとより、慣習や、あるいは計画や約束や命令が与えるある種の期待などが含まれることだろう。「つねに想定している」という言い回しには注釈が必要である。そうした繋がりをつねに想定しているといっても、われわれはそれについてつねに意識しているわけでも、言及できるわけでもない。ある出来事の後にはあるタイプの出来事が続くであろうという期待は、ネガティブな出来事という形でその期待が破られなければ、意識もされることも「期待していた」と言及されることもないような「期待」であって一向にかまわないのである。

ネガティブな出来事に遭遇することによって明らかになるようなその期待は、出来事との繋がりやの把握に伴われるものである。そうした出来事の繋がりやの把握が、受動的な観察だけでなく、能動的な操作を通じて達成されるというのは正しい⁽³⁾。そしてそれを達成する試行錯誤の過程の中で、われわれはネガティブな出来事に——そうでないポジティブな出来事と全く同じ重要さで——不可避免的に遭遇することだろう。この意味でもネガティブな出来事は決して例外的な、付属的な、寄生的なものではない。むしろネガティブな出来事存在は、われわれが世界を出来事や出来事の繋がりによって把握している、あるいはしつとある、しようとしていることの証拠なのである。

注

(1) D. デイヴィッドソンは、『*Essays on Actions and Events* (New York, 1980)『行為と出来事』、服部裕幸・柴田正良訳、勁草書房、一九九〇年)において、彼自身の分析から例外的な(あるいはそう見える)因果言明として「スプリングラーの不作動が火事をひき起こした」をあげている(*ibid.*, p.161 [二二六頁])。またS・コロヴィッツは『*Causal Judgements and Causal Explanations*』(*The Journal of Philosophy* 62 (1965), 695-711)において、C・J・デュカスが提出した原因であることの規準に対する反例として、「混合ガソリンで走るサーフのエンジンが止まったのは、運転手がオイルをガソリンに混入しなかったからだ」と言いうるようなケースをあげている(*ibid.*, p.697)。

(2) Arthur C. Danto, *Analytical Philosophy of Action* (Cambridge, 1973) VI章参照。引用語句の記号の文字は変えてある。

(3) もちろんここで彼は端的に腕を上げなかったのである。麻痺した腕を上げるための装置のペダルを踏まないことでの命令に逆らった場合は、基礎行為としてのネガティブな出来事のケースではない。

(4) Georg Henrik von Wright, *Norm and Action* (London, 1963), とくにIIからIV章を参照。「p」における「p」や「q」は状態を表す。「T」は transition もしくは transformation の頭文字で、その左側に書かれるのが初期状態、右側が終了状態である。ウリクトの言う「状態 (state)」は「タイプライターが机の上にある」のような静的なものであるが、「雨が降っている」のような動的な「過程 (process)」も、状態と同様の仕方で出来事を構成できることが示唆されている。たとえば過程の開始と終了は出来事である。

(5) 「成果 (result)」はウリクトの独自の用語である。窓を開けるという行為の成果は窓が開くという出来事であり、行為と成果は内的に論理的につながっている。ちなみにその成果がひき起こす新鮮な風の流入や室温の低下といった出来事は、その行為の「帰結 (consequence)」

と呼ばれる。行為とその帰結のつながりは外的な因果的なものである。バンクしなかったことというネガティブな出来事が、タイヤを取り替えるという行為の帰結としてもたらさせることがあるかもしれないが、それはバンクを防ぐという行為の成果として再記述することができる。本論文において成果と帰結の区別を問題にする必要はないだろう。

(6) 日本語の「こと」という言い回しは曖昧である。英語の *that* 節に相当するものとれるが、本論文ではそれを、出来事を指示する（か、少なくとも指示するように見える）単称名辞として使っている。出来事を指示する単称名辞は、英語では典型的には定冠詞をとるような動名詞句として表される。

(7) 「 $d(pTp)$ 」のような「 d 」で始まる式は、「 d 」の後の丸括弧内に表された出来事（この場合は pTp ）を成果とする行動（act）を表す。一方「 $f(pTp)$ 」は「 pTp 」を成果とする差し控え（forbearance）を表す。「 $f(pTp)$ 」と「 $d(pTp)$ 」は同じではない。ウリクトの用語では、行動と差し控えの二つが行為（action）の下位クラスを構成するのである。

(8) 挨拶のような行為に、ウリクトの分析はうまく適用できないと思われる（少なくともウリクトの説明からはどのように適用されるのか明らかではない）。いったいどのような状態の変化が成果として、挨拶すること（挨拶し始めることではない）に対応するのであるか。挨拶のような場合、成果ではなく行為そのものを出来事と見なさざるをえないであろう。この種の指摘はデイヴィッドソンによって為されている（*op.cit.*, p.113（一四二頁））。

(9) Gilbert Ryle, "Negative 'Actions,'" in *On Thinking* (Oxford, 1979), 105-119. ライルは「待機する」「休む」「秘密にしておく」なども「ネガティブな行為」に含めている。しかしそうした行為はライルも指摘するように、しばしばきわめて長い期間にわたって為される。現に「待機している」「休んでいる」「秘密を守っている」といった、

出来事というよりは過程のカテゴリーに関する言い回しの方がむしろよく使われるように思われる。したがって、待機することや休むことや秘密にしておくことは、ネガティブな出来事であるとしても、周辺の事例と言えよう。ところで、ライルは変化の阻止について論じていない。「興味に欠ける」としてそれらを考察の対象から外している。もしライルが、行為によって達成されるのは単なる状態というよりはむしろ変化（出来事）であると考えていたなら、変化の阻止はもう少し興味深いものとして扱われていたであろう。

(10) この点でダントの叙述はややミスリーディングである（*op.cit.*, p.172 参照）。

(11) Ryle, *op.cit.*, pp.107-109 参照。

(12) von Wright, "Time, Change, and Contradiction," in *Philosophical Logic: Philosophical Papers Vol. II* (Oxford, 1983), p.125. 文脈を考慮する必要があるかもしれない。ウリクトが論じているのは時間の概念と変化の概念の密接な関係であり、たしかにその議論からすれば、変化を、連言が矛盾になるような状態の対と見なすことは重要である。

(13) Danto, *op.cit.*, p.174.

(14) ただしライルは後半で「下位的（*infra*）」という語をやや異なった意味で使っている。すなわち彼は、ネガティブな行為は否定という形で下位の行為に関わることも述べるのである。

(15) 「時点」と言っても数学的な一点を指すわけではない。たしかに一般に出来事は時間的な広がりをもった期間に生じると言うこともできるだろう。しかしそのように言ったとき、われわれはもはや事態を出来事として記述しているというよりは、開始という出来事と終了という出来事に挟まれた一連の過程として記述しているのである。端的に「四日に」と述べられているようなときには、事態は出来事として記述されていると考えられ、その場合には「時点」の語を使うのが適切であろう（私は、ある「時点」に「生じた」と言うのが適切になるように「出来事」の語を使っているが、それは不自然な規定ではない）

と思う)。以上に関連して言えることは、本論文で「ネガティブな出来事」として例示した事態が、出来事としてではない仕方で——過程や状態、あるいはそれ以外の非出来事的なカテゴリーによって——記述される可能性を私は否定しない(それどころか、あえてそのような仕方ではネガティブな出来事を処理することは、何らかの特定の目的にとっては有効であるかもしれない)ということである。

- (16) Ryle, "Negation," in *Collected Papers*, Vol.2 (London, 1971), 1-11 参照。否定に対するこうした考え方は、ネガティブな出来事に対してライルに次のような主張をさせる。「ネガティブな出来事の中身の無さは……存在や生起や遂行等の否定一般のもつ事^{オブジェクツ}実^{ホロウネス}的な中身の無さの一特殊事例にはかならない」(*op.cit.*, 1979, p.114, 強調はライル)。しかしここでは、ライルのこのような見解に満足するわけにはいかない。

- (17) 否定一般に関する議論については、A. N. Prior, "Negation" (in *The Encyclopedia of Philosophy*, London, 1967, 458-463) が、概観を与えてくれる(ただし「ネガティブな出来事」への言及はないが)。たとえば《個々の否定文に対応する固有のネガティブな事実の存在を認めると、そのようなネガティブな事実は、つまらない意味で無数に存在することになってしまふ》といった議論を、ネガティブな出来事に関して考慮する必要はない。その議論は、結局、「文」と「事実」の「対応」に関する誤った考えを前提にしたものであると思われるが、いずれにせよネガティブな出来事に関する文にそうしたタイプの議論は明らかにあてはまらない。ここでの議論で、目覚まし時計が七時に鳴らなかったことというネガティブな出来事を認めたとしても、それが同時に、たとえば目覚まし時計が七時に象に踏まれなかったことや、七時に発光し始めなかったことや、七時にジョーンズに買い取られなかったこと……等々までも「ネガティブな出来事」として認めることにはならないからである(目覚まし時計は七時に象に踏まれなかった)や「七時に目覚まし時計は発光し始めなかった」などの文は真で

あるかもしれないが。

- (18) 「美德は四角形ではない」という文が何も表現していない、と断言すると反論があるかもしれない。その文は美德を形容するのに形の力テ^カゴ^リリーが不適切であることを示しているのであって無意味なものではないという反論である。しかしそれが「彼女のハンカチは四角形ではない」というような普通の否定文からかなり異なったものであることに変わりはない。

- (19) Peter Geach, *God and the Soul* (London, 1969), V 章参照。「単なる『ケンブリッジ』変化」という奇妙な名称は、ケンブリッジにいたラッセルやマッタガートらが考えた変化の規^{レギュラ}準^ラに由来している。彼らが考えていた(とギーチが言う)規^{レギュラ}準^ラとは次のようなものである。すなわち《ある適當な解釈のもとで「t 時に『F』」が真で「t 時に『G』」が偽であると言えるなら、その『F』は変化した『G』。ギーチの見解は、むしろ全ての変化がケンブリッジの規^{レギュラ}準^ラを充たすのであってその逆ではないというものである。そしてケンブリッジの規^{レギュラ}準^ラこそ充たすものの変化とは言えないような「にせものの変化」を、彼は「単なる、ケンブリッジ」変化と呼んだのである。

- (20) *ibid.*, p.72.

- (21) Jaegwon Kim, "Noncausal Connections," *Notas* 8 (1974), 41-52.

- (22) Myles Brand, "Particulars, Events, and Actions," in M. Brand and D. Walton (eds.), *Action Theory* (Dordrecht, 1976) 133-157, p.147 参照。ただブランドはキムの「ケンブリッジ出来事」を、「関係的な出来事 (relational event)」と言い換え、もはやギーチの議論とは関連づけない点で、より慎重である。

- (23) しかし、ギーチの「単なる『ケンブリッジ』変化」に多義性がないわけではない。彼は、ソクラテスの身長がテアイテトスの身長より短くなることも「単なる『ケンブリッジ』変化」の一例としてあげているからである。なぜギーチがそれを「単なる『ケンブリッジ』変化」としたのかは明示されておらず、その例は議論の流れから遊離してい

る。ソクラテスの身長がテアイテトスの身長より短くなることは、おそらくキムの言う「ケンブリッジ変化」でもあろうが、キムがあげている他の例とは重要な相違点もあり、さらに区別して扱う必要があるものと思われる。

(24) キムは、ソクラテスの死とクサンティッペの未亡人化を同一と見なしえないような立場をとっている。だがそのような立場をあらかじめ取らないならば、それらを同一でないとする彼の論拠——生起した場所の違い——は説得力を欠く。われわれは出来事が生起した場所についての明確な規程を手に行っているとはとても言えないのだから、クサンティッペの未亡人化の生起した場所がソクラテスの死のそれよりも不明確であるとはとくに思えないのである。また、同一性の主張がつねに取るに足らないものであるとは到底考えられない。するとキムが考えているように「区別できない」というところにその主張の眼目がないことは、明らかである。

(25) 二つ出来事が「同一である」と言うことができるなら、この文は因果言明としての資格を「ソクラテスによる毒杯の飲み干しがソクラテスの死をひき起こした」と全く同等に持つことになる。

(26) キムは「リアルな変化」という概念を詳しく検討していないが、次のように示唆している。すなわち、「物体、中での変化」が「リアルな変化」なのであり、その最も自明なケースは「物体の構成における変化」である (Kim, *op.cit.*, p.51, 引用語句の強調はキム)。

(27) *ibid.*, p.48.

(28) こうした言い回しはキムのものである。「出来事の階層構造」には、それと密接に関連した「行為の階層構造」が対応している (*ibid.*, p.46 参照)。たとえば、ソクラテスの死をもたらすことによってクサンティッペの未亡人化をもたらすことはできるが、逆はできない。その意味でクサンティッペの未亡人化はソクラテスの死という「より基礎的な」出来事に「依存」している、とキムは言う。「行為の階層構造」はアルヴィン・ゴールドマンの「行為の樹 (act tree)」の考えを

受けたものである。ゴールドマンの言う「行為の樹」とは、非対称的で非反射的で推移的だが因果関係ではない「によっての関係 (by-relation)」で樹系状に結ばれたひとまとまりの行為群のことである。

(Alvin Goldman, *A Theory of Human Action*, Princeton, 1970, 参照。なお、同書 pp.47-48 にネガティブな行為への短い言及がある。ゴールドマンも、一応ネガティブな行為を「行為 (act)」の中に含めているが、詳細には論じていない。)

(29) ある状態の発生が阻止された場合、たしかにその阻止の行動はポジティブなものであるが、行為とその成果は同一ではありえない。

(30) 因果関係の把握する際の行為や操作の本質的な役割については、たとえば von Wright, *Explanation and Understanding* (New York, 1971) 「説明と理解」丸山高司・木岡伸夫訳、産業図書、一九八四年」のII章参照。

文献

- Brand, M., and Douglas Walton (eds.), *Action Theory*, Dordrecht, D. Reidel Publishing Company, 1975.
- Danto, A.C., *Analytical Philosophy of Action*, Cambridge, Cambridge University Press, 1973.
- Davidson, D., *Essays on Actions and Events*, Oxford, Oxford University Press, 1980.『邦訳』『行為と出来事』服部裕幸・柴田正良訳、勁草書房、一九九〇年。]
- Edwards, P. (eds.), *The Encyclopedia of Philosophy*, vol.2, London, Collier Macmillan Publishers, 1967.
- Geach, P., *God and the Soul*, London, Routledge and Kegan Paul, 1969.
- Goldman, A., *A Theory of Human Action*, Princeton, Princeton University Press, 1970.
- Corovitz, S., "Causal Judgements and Causal Explanations," *The Journal of Philosophy*, 62 (1965), 695-711.

- Kim, J., "Noncausal Connections," *Notes*, 8 (1974), 41-52.
- Kyle, G., *Collected Papers*, Vol.2, London, Hutchinson, 1971.
- , *On Thinking*, Oxford, Basil Blackwell, 1979.
- von Wright, G.H., *Norm and Action*, London, Routledge and Kegan Paul, 1963.
- , *Explanation and Understanding*, New York, Cornell University Press, 1971. [『説明と理解』丸山高司・木岡伸夫訳、産業図書、一九八四年。]
- , *Philosophical Logic: Philosophical Papers Vol. II*, Oxford, Basil Blackwell, 1983.